



中村俊定文庫  
文庫 18  
897



祖郷居すを去るぬひは筑はふよ  
出そそく教みわする者凡老人  
陪後一とらうたうあつまにたりと  
過る庵うの如くよ能語れ三昧也  
遊ふる一羊阿り安政五年八月七日  
一殺流り如やまの如に羅りそ大に  
示無き過るに実をり如くす



大祥如已の唐より丁卯の如きははるるを  
依て書らるる一巡如迷句成修りし是に  
時と通じて成に心と心と考に器物と  
澄月集と補をて雲々の如きもの  
居たの信友は青名新甫をより弟子  
らるる意に如人々多々の様と抽と  
此の如きものなをて成に玉極と

記は是の如し一時を仲秋澄む月影の  
限なく照らしとて黄白如きを其の如  
明らけく海よりなり祀事よりたまのん  
に如月をの成め傳事らん子と云く  
物に阿るるなり

庚申八月

たか



招起俳諧之連歌



組師居士

月波や 梢の 風結竹 をふく

祐の 蝶と 割る 蛙 春の 新 雨

山雀の 籠と 春を 為つ 秋 暮 載

かき けし 柳の 繩を かけ 出く 首 廣

軽舟の 舟を くる 舟を 雪の 峰 完 路

<sup>カラシ</sup> 辛き 白しを くる 秋 暮 已 一

後新よりうきし一柳も泥よりふせ  
ト早

後へあふくつて何ぞのれぬ 咳  
あつら

忘る初る佛の分るべきをこそ  
波路

みの草を銀のちちめきし 若  
葛之

煙次手流を分家の店おらし  
抱珠

四五年先能若お氣の清く  
涼を

月の出も半時進い 唯の志  
尾お

嘴より上りたちし 毒雁  
鴉渡

さつらうと世が足跡の振りぬ  
松石

能勢のさう能勢持おらう  
内能

面くよ若おきし 玉衣  
若山

弥生日如の只より清く  
玄和

試みの茶は何ふあふとるあせ  
きく惟

却りるへ別よとのま中 築  
世井

刺を控へてと 穂よある新穂  
玉海

逢ふよあし 孫の手を志く  
若草

鼻繩をうきうきと志はする 故世は 穠市

曇りくもる夕よさのしほやむ 世大

くわつ火のおもる 船の奏え上り 芦城

ようきくもる 狐の志あらし 左雨

弱常しく若きくもる 玉袖 木上

柳津水も水心やそく 素衣

空の中を語する 舟き 月の秋 尋香

耕 地のねよ 畑の 啼 雨兮

年柄の庭に酒を流るる 辺に 白記

糸會ふをたぬぬ 断 里 豊是

砂利をうきうきと流るる ぬるる 虫休

未端控うる ぬるる 吸 光 ぬ 泉

人ゆり ぬるる 志あぬるる 志の 志と 控 香

春をうきうきの 西よ 鳴る 鐘 穠 華

右一順満尾

あつと載る時の句章をいづる年の冬過日庵  
火災の後ちりちし跡を函底を求め且つ日成  
経つてその半書居る意を知らず一物終るを終る  
並へ中つある今此過日庵主は書きて松あふ  
節を愛する此家の文庫を採りに使ふを其  
なり遠海無他日懐父より懐紹を結ぶべき  
編をたんと久

秋の風をころよと我ひて過日庵主  
あつと載る句章をいづる年の冬過日庵  
二十余年の旧文只一冊のちりちし跡を  
ぬる眼はあつと我ひて過日庵主

あつと載る句章をいづる年の冬過日庵  
あつと載る句章をいづる年の冬過日庵  
あつと載る句章をいづる年の冬過日庵

追悼

あつと載る句章をいづる年の冬過日庵  
あつと載る句章をいづる年の冬過日庵  
あつと載る句章をいづる年の冬過日庵

あつと載る句章をいづる年の冬過日庵  
あつと載る句章をいづる年の冬過日庵  
あつと載る句章をいづる年の冬過日庵

葉月のさめたる尾のらや—浮世の

月を足果らせ—とほし

かみとるあうぬ巻絵の巾・能書

乙也

車馬店の方へおろりきき祖代屋の

終馬をのびむ

藤ふらるるもよもはを以て葉うた

布山

月おろりて叶樹もくら—處—とせ

懸高

原

意よりうとせれをほそふ秋の考

虫風

祖師老人の身まかりきりむ

白葉の若きくはきりのをぢりき

銀窓

何よそは用らるる人々木のきもき

如猿

日の入るさう—まひぬさき—糸

事松

一葉の葉るる葉の根を他まよ

一葉の葉るる葉の根を他まよ

何の終馬をよき

月をさるる葉をよき—海—の

五後



子供の遊ばし、葉のちり、智の心

葛籠を走人、もよおし、娘入

次の同結、ひきつら、屏風引まじし

着帯、しつ、き、唇のよまう、朱

袂の、あま、鼻帯を火、よ、焙、里

夫との、草鞋、智、よ、結、し

う、浪の、あま、し、の、帯、よ、ま、の、月、の、思

あま、う、よ、人、氣、の、か、ま、る、帯、色

如

装

如

如

装

如

如

装

あま、う、よ、ま、ら、ん、と、あ、り、の、畏

干、鳥、の、ほ、ろ、け、る、里、持、持

か、信、の、ま、も、の、あ、ま、の、あ、ま、ま

葉、屋、結、離、の、仕、舞、あ、く、せ、る

海、の、鏡、よ、ま、ま、ら、あ、ま、の、草、鞋、ま、じ

空、結、あ、ま、の、お、も、と、の、せ、ぬ

雨、さ、れ、よ、中、ら、ん、と、あ、ま、の、堀、の、板

藥、田、あ、ま、の、あ、ま、の、清、め、あ、ま、を、奉

如

如

装

如

如

装

如

如

何れも人の教へたるよきもの 結

生れは稀なるもの 天

神に乞ふは 世に難く 悟る

料 多きを乞ふは 世に難く

在りて 世に難く 世に難く

傍ら 医者へ 病を乞ふ

病を乞ふは 世に難く 世に難く

延薬は 世に難く 世に難く

結

天

悟る

世に難く

世に難く

病を乞ふ

世に難く

世に難く

何時も 世に難く 世に難く

かゝる 世に難く 世に難く

人の心 世に難く 世に難く

古の 世に難く 世に難く

何れも 世に難く 世に難く

物に 世に難く 世に難く

結

天

悟る

世に難く

世に難く

病を乞ふ

何時も 世に難く 世に難く

かゝる 世に難く 世に難く

人の心 世に難く 世に難く

古の 世に難く 世に難く

何れも 世に難く 世に難く

物に 世に難く 世に難く

結

天

悟る

世に難く

世に難く

病を乞ふ

追善

佛の徳やとせをまねけりて

尾お

慈悲祖の佛のたのよき文心よの徳

茶燈りのよき徳まねけりて

三度の忌辰ともあつぬ

みそ萩やとせりて

懐父

時をよきまねけりて

梅通

知りちき徳しとゆへや夕陽

芹舎

遠山のうねり智よの飛はるぬ

公成

波をよきまねけりて

石舎

風をよきまねけりて

淡若

黄鳥のまねけりて

文法

扇をよきまねけりて

赤南

櫻をよきまねけりて

池





とさきくつらぬのちやとくく柳の葉 庭木

伐りたてて人おこらふを牡丹葉 半葉

一里たてて夜ゆき旅ちむる葉 葦坡

岸すのち子あそぶちたけけのう人 板舟

年をち成る心時をたけけけ 宇造

善定一様様よとゆる沼の邊 木島

漢雪ちりふり名籍一庭造り 桐載

雪をちりふり外よふ阿ふちを 菱里

風をちりふり葉よふり 松林真 大葉

やめをちりふり問は流の傍る 石うね 丹崖

葉をちりふり氣長り水けり 里こころ 木直

雪をちりふりしゆく 友の 莖うね 徳平

雪をちりふりるやんふり 柳板舟 三都里

麦畑の地をよる居をいづるふ里  
 雪裏  
 こゝろの 漸に暮あつたけり 郭公  
 獨醒  
 雪をまき月吹きまき 廣鐘の如く  
 夏松  
 石あををきあつた 乙女山の間  
 稚就  
 雪を掃くまきまき 空をわきまき  
 ぬ猿  
 天のやま ぬきまき けり 孝子のを  
 松郭  
 太鼓うつ 昔は共うへや ぼり 雪  
 霜我  
 帷子や 衣をきまき けり の身よまき けり  
 雪庵

協の居り 勤のまき 雪や けり けり 雪  
 結湖  
 裾に けり けり けり けり 雪  
 雪  
 膝く 月をまき けり けり けり 雪  
 井子  
 雪まき けり けり けり けり 雪  
 銀密  
 月のまき けり けり けり けり 雪  
 梅丘  
 射を けり けり けり けり 雪  
 庭雨  
 けり けり けり けり 雪  
 雪老

河津のしほりやあはれなまはるる花  
 木下より花の出さるる牡丹 一清  
 向ふより花の言花や出月情 梅裡  
 櫻の宴花をあるる岸や浮寐る 景初文 静安  
 漢宮や銀箔の樞言花よさるる海 李暎  
 山吹やふれり若さるる花 不逞  
 之より花はさるる中より戸掩の塵 三楓  
 夏柳や思ふたさるる花 雨のさるる 呂秀

枇杷の葉花をさるる花 風士

梅命のさるる花 正月のさるる花 完伍

之秋のさるる花 花 遠守

川尻やさるる花 正月のさるる花 塞馬

入るる花をさるる花 花 島谷

接多花を吸ふさるる花 花 杜永

河之くも月もふ影あり 籠り坐 土臺

空船を並引く世中もきき 素朴

とちりくひふくむる花屋 雀生

雨のゆるねもあまじく 初因る 月 栢

と暮れやまきりちりちりぬき雪 係 是

山降るはなはれも物もいふもいぬ 推 山

鐘〜〜と響きあはれしを危 彦 費

極さくや雪を喰ふ子粒立あらし の 轉

日よ遅く風よあま〜〜 枯竹の葉 立 宇

名目や池よ深〜〜 夢の 糞 白 羽

雲を結ぶくもをよ〜〜 波の沖に 空 淵

見よとあはる 是れよよ〜〜を毒の海 園 外

さらさらや 栢よのさ〜 霜の 雨 雪 年

極も極も〜〜ら 吹り音のさ〜 士 殿

名月の外能まうけや池よる 旭  
 吹雪よま—霧の毛うらや芦の角 己有  
 葉吹くおそよままはぢうりうま 而先  
 何ちう傳も 多め 峠の 花さきさ 砂山  
 人言う本めくうゆる 扇う舞 撮雪  
 船のまや 掃除のまう—心庭先 注山  
 花のまもやうう 花居 籠の 破らる 水屋

其

水は新あく黄雪の 機娘う水 祖紹  
 切芝をまうう 出能 返 美 から良  
 紫玉の 飾り 扇よ 絵を書き 乙 早  
 ちうあ—と 伝を 心葉子 昆布 由 松  
 解つき— 空を 葉うる 月が 宵 良  
 何語うも 志う 傳え む 仁

其

石室をいづる海造をゆゑに

質をいづる書物を出さ

いづるしる海造をゆゑに

素顔を見せしめられぬ家

半纏の持しる船 卸

室へ降る空も路へ入梅あり

堀たりの筆船は 箸 玉 亭

蒸もるいつしる中もあめ下被

廿三

登

早

白

良

早

登

良

白

中におく事おんやうとせし月明り

うのせしおんを猫の首に輪

暎をいづる一休尼の裏通し

石をたしりし時をくら鏡

陵河舟を縁角をあたし神巫の母

園を履くしる屋へ嘘を讀

暎よ海造形むの日延し

半纏をいづる切し鼻鏡

廿三

登

子

白

良

子

登

良

白

乞食の身もたのむは 瘡を治すは 秋

西行庵の 冬やの 夜さま

お仙のとうりけ ぬきおくと 春

魚花のうら 毎日は 春

刀をぬ 了紙活の うら おまへ

おの 傳よ 志のまを 春

何とまくぬ 春の 神よ 月のま

朱鬼を 春へ 春の 時

秋

春

春

春

春

春

春

春

春のまも 春の 春の 春

総集 阿春の 春の 春

春のまも 春の 春の 春

時年 春の 春の 春

春のまも 春の 春の 春

春のまも 春の 春の 春

春

春

春

春

春

春

祖給佛のたまへしむらさきの

忘りよらへしむらさきの

今よと結し葉のあとも涙も結る ト早

おとあ

過るりよと結れぬむらさきのや 露の月 ぬつと

耳よ珠散らさるる手折や 枝娘 凌山

門よの蚊きくさるや 夜の新 桑峰

大船の入付結所とや 舟の雁 蒼波

雪あふまを枝や 初りよ 向ふ鳥 久菜

陽炎や朽葉もさき 出ま 庭のゆく 川澄

田の蛙啼くくろく 出ま ねるくろく 水井

枝葉よや 初見くろく 葉の貸す後 虫風

黄きや 初書くろく 葉よ 来る 所風





縁ぬきやうのよふやう之をめり 逸志

人よそのとくをせし始一秋の唇 法雲

慙くは是弱蓮のふれ 法雲 孝輔

つふやや市了んくまう 法雲 嶺岐

叶枯了輝居うせし月夜うれ 友甫

雨多き雪も春ら 富吉 友甫

雨多き雪も春ら 富吉 友甫

葉もみし秋のあまし 一よ麦の秋 粟欣

月よ華よ人をたぬけし 吟歌うれ 修文 成章

家よとやめをう十六角豆 其 翠

人よとやめをう十六角豆 其 翠

飛ぶ方へまぢあしうや 莖 結子 錦 伴

結んときき 翁やあしきき 昌 海

葉のむきや春の思りのり 友 松

はらばらとて入るる花の灯 和 南

松うきうのくねきう〜みよ 雲 一 峰

雨のそそ果あくも有る 明 佳 山

まね人のほろ物まゝ 燐 炭 精

襪固まや出ぬ事〜字の初 初 嘉

雨のりや雲の〜いよのまむ 山 梅 枝

蓮葉のまねり〜白の旭 一 部 後 楽

あまのいよひ〜あまのまのま 木 乙

ゆ〜とあまのまのま 神 性 後 来

黄衣の〜あまのまのま 木 乙 又 乙

刈あま〜雲のまのま 中 一 篇

有るまの〜雲のまのま 雲 の 月 心 星

花のまの〜あまのまのま 雲 一 篇

伴のまの〜あまのまのま 木 乙 梅 山

青梅の〜あまのまのま 枝 一 篇 雄

大和やうらるるきりて 孫生れく 中 儀

山降やきりよきしの 雛をむる 中 儀

春さきしるきり名はりの 雛のぬる 柏 葉

さかしのよききり 山よききり 柏 葉

積りきりるきりきり 炭 俵 風 辛

釜の湯熱きりるきり 風うきり 旭 高

作うきりるきりきり 菊うきり 二 橋

末屋所の黄きりきり 木料下り の 候

麦秋やきりるきり 菊のよききり 桃 園

降るるきりるきり 菊の牡丹くれ 菊 水

わききりるきりるきり 菊の備へ 西 菊

鎌きりるきりるきり 菊の那 森 年

采古きりるきりるきり 忘 州 月 杵

中の記をくも来りそをちやむ心登  
 乙良  
 ろの案せむ枕時斗や初改帳  
 營成  
 風をやむ出実いりふり了まの矯  
 清石  
 燈をうらまへむ袖をいぬ垣隣  
 積翠  
 ふうしきや春の矯もきりぬ里  
 柳鼻  
 宵のうらまへむさうらや天の川  
 青洋  
 神の意のくきや 蝶能考  
 習静  
 幾士のうらまへむ中よ志くせり余  
 契史

改きり大や山の火車も足えうら  
 在像  
 蝶能考やうらまへむの牡丹の芽  
 常晴  
 来りてうらまへむある来下り那  
 桑屋  
 来りて志をくしあつちり人やむの中  
 遊古  
 初秋やうらまへむあるぬおを先  
 市猿  
 帷ををるうらまへむあるのしんらう  
 来峰  
 初春もむのうらまへむある柳の那  
 茶山  
 春もむのうらまへむある雪車のをしんら  
 古棠



新

雨のりも帰る貴を老く一帯里 空 珠

何れも過る枯竹よ日能昇る 旧 左

十月の故もるる歩ゆのくをうく丸 園 山

松風よ裾ゆく神の旅出の那 赤 雲

堀中よはけしるるのよ能くし 後 氏

竹先り蛙うきしきゆり持うる 家 二

烟や々よまうしちなき夕を海 進 剛

新夕もまらぬまゆりや能くきぬ 申 雲

青木能くまの白ふ梅も水 首 唐

穀ものよまらぬよ船のほよよまを 祖 紹

ほよよまかきまはまよまを 繩 新 甫

庚さきゆく軍一帯ゆよ月のき 唐

過入もまらぬもく端柳のけら 雲

海城も一過後よ江湖あは

家少りおりのお年の敵

余はもろく寝る後せしおのけき

きよきよきよのせきいよくら

きつていよけいよけいよけいよ

きよきよきよけきをいよる枝木

燈籠のうをゆるむよよ酒る月

濃きよ味ある露の露一屋

南

南

細

整

唐

細

南

唐

整

画のさしおのるさへお代り字

きよきよけいよの刺刀を研く

るよよいよおのるよむむのつて

組合も多なりてきよ水口

修定よりいよの出来よ卑下をいよ

ちよきよの鏡をはきよ一徳箱

おのりよけいよのけいよ字よくき

けいよけいよのけいよ字よくき

南

細

整

唐

細

南

唐

整

比良横川名茶の如く来より茶

出産届を別より送りせむ。

お茶をくちく交りいしを是とす

并苗届を済せし居ぬ小屋

うすくは織布の織物よりぬき

病をくちくも湯浴より供く

その中より山のさくら——二月の月

甚だしいよま いまう

南

紹

松

廣

紹

南

廣

松

子供おを茶の家より先へきり

やめりてそまら橋の造くらし

茶より二丈——いしとる 鳥

御弓よ力の古き標札

夕陽よるけりとも志ぬる一本

置るの供むはしす村の籠

南

紹

松

廣

紹

草

過日庵三周忌

秋の暮 菅原

あはれなる秋の暮

世の習いあつゝと人の生あつゝ

よもあつゝあつゝ

あつゝあつゝあつゝあつゝ 梅の葉 新南

涼—きを柱とく—川社 春湖

水たの清き一梅よ入日之柳 乙也

兼入やとまのふりを屏風也 茶瓢

あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ 史山

接ぎつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ 良の

招きつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ 蓮池

あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ 省甫

小葉もあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ 蒼山

志をくくハ知くくたのむぬ楳の蔭 出川  
 正月と人さいふあり 雪の 里 木 和  
 幼草やまつ 蔭く を月の宮 楓 九  
 ちつ 楳やけりうり をくく空のを 芳 泉  
 雪の白くく 柳の 柳 巨 推  
 六月や人より 中 鶴 高 岳  
 村木く 蔭のなをくくく 葉の 花 未 足

雪のくくくくくくくくくくくくくくく 古 二 具  
 雪のくくくくくくくくくくくくくくく 中 雲  
 山水を 蔭を古くくくくくくくくく 松 竹  
 是をくくくくくくくくくくくくくくく 得 甚  
 山水や 蔭年 出 生 之 一 生 麦 節 之  
 志をくくくくくくくくくくくくくくく 宿 半 月  
 新雪くくくくくくくくくくくくくくく 山 子  
 蔭を古くくくくくくくくくくくくくく 古 孤

天の川晒布のうへよ十文字 若山  
 山萩やまき吹くまゝのあつれ枝 石海  
 帆をひく風の名起るや錦 公 善陽  
 初雁や葉あよるまゝ一松一葉 雪来  
 志まゝ一風を湖はまきまゝのまゝと 然く  
 八重印と人あらまゝのあゝ一降る也 崎岡  
 よき中のまゝのまゝの月名うれ 変山  
 行夢と知る戸さゝし高きや杜宇 右年

祇園去や信む身よ知る都あり きく雄  
 桐成る新しむ湯をわく 水 甘志  
 叶桂る庭をまゝのまゝの秋 梅並  
 鶯の息のほくくつ起るや出栢川 弘湖  
 花のまきまゝの結をまゝの日中 岳芸  
 花押も海もまゝの國の若さうま 白実  
 河のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ 玉以  
 ころめのもゝまゝのまゝのまゝのまゝ 燈井

海原とんちをき眼のきききうれ 等哉

あつさ川のむのふや毒の月 芦月

昔昔昔時出掛くやしと毒肉 付島

木の葉やうさぎの聲一秋のふ 孝月

毒をたつや麻布の物うさぎ 荷サ

二夜とらふ旅籠の風呂や檜の毒 豊足

結むけけー地衣衣をまきき啼ふ物 懐父

蓮池のつらもふありし文月の毒 如松

船はきや原のふ陣 桃もるもる 見外

あつさよお用のつらもるもる 時彦

夕顔る人やらをや毒もるもる 峰山

毒もるもるもるもるのつらもるもる 毒

水船の若場よふさき 柳の那 肉龜

昔昔昔氣よふさき 松 毒 柳

相乗や砂よ水つらもるもる 毒 古友

毒もるもるもるもるのつらもるもる 毒 平

暎より暮ふりし夕庭より木槿 氷巻  
 簾の末末亭の窓をさす花の香あり 秋之  
 庭の樹や田舎をさす花の香あり 如白  
 懐の心くくく世の人の通る 素剛  
 心あふくくくくく 燕 板 世 負  
 花の露はたらしあり 常春 秋の香 飛 将  
 朝の光の香 帷子の時の香 結 海 之 住 香  
 橋の光の香 家 家 家 の 香 月 夜 露 甘 茶

餅より餅 花新の香の香 不 漆  
 天の川をさす 鴨 葉 の 香 風 小 雲  
 眼を閉る 香あり 友の香あり 五 休  
 初月や身よ 花の香 川 手 香 留 木  
 何もの香 花の香あり 花の香あり 留 秋  
 葉 花の香あり 花の香あり 秋 花 香 寄 心  
 時斗の香あり 花の香あり 花の香あり 玉 清  
 何もの香あり 花の香あり 花の香あり 花の香あり

志つちを詠ふきりや唐や桐葉葉 抱葉

一葉落つてあつさり亭はし風の極 永年

朝の由よとくのかきりのあら〜 蕉阿

春の阿らる尾上の松を天の川 其毎

日結りちの種むつよ〜 一瀬うら 号室

冬牡丹をよ〜 清く 燈のきよ 且商

花僅しむ〜 花きり 未三この歌 紫山

立世〜 立世の身ぬきむや 西橋の戸 浮十

碧きりよよ〜 秋 冬 郎

世々も居りよ〜 柳のりぬ 冬 雄

流の身よ〜 清く〜 燈 紅 虫 得 永

とよ人の阿ら〜 夕水を 暮る〜 希り 五 雀

揚む阿〜 中へ〜 出せぬ 蘇の草 素 雀

おもしろ〜 燈を〜 唐の 故郷は 茅 城

是といふ〜 子更〜 け〜 ぬ 梅 未〜 う 草 南 交

さみ〜 多〜 世〜 や 裾 唐〜 山〜 の 形 尋 美

花より <small>も</small> た <small>り</small> ふ <small>き</small> 家 <small>の</small> 瓢 <small>う</small> 茶 <small>子</small>	冬 <small>の</small> 中 <small>や</small> 花 <small>の</small> み <small>よ</small> む <small>言</small> く <small>さ</small> ま <small>ま</small>	か <small>る</small> の <small>み</small> 能 <small>鳴</small> く <small>相</small> を <small>を</small> 鳴 <small>よ</small> り <small>里</small>	折 <small>ら</small> の <small>り</small> 粘 <small>や</small> と <small>め</small> る <small>実</small> も <small>隊</small> し	起 <small>り</small> く <small>き</small> 淫 <small>衣</small> の <small>あ</small> る <small>ま</small> ら <small>う</small> 如	杜 <small>美</small> の <small>あ</small> の <small>ぬ</small> ら <small>し</small> り <small>雪</small> 初 <small>く</small> し	新 <small>能</small> 能 <small>も</small> 露 <small>華</small> く <small>あ</small> り <small>ぬ</small> 天 <small>の</small> 川	遠 <small>岐</small> の <small>葎</small> る <small>手</small> 葎 <small>や</small> 初 <small>河</small> ら <small>し</small>
采 <small>土</small>	冬 <small>林</small>	稻 <small>津</small>	樹 <small>石</small>	葛 <small>之</small>	地 <small>林</small>	完 <small>臨</small>	白 <small>紀</small>

う <small>き</small> ま <small>を</small> き <small>く</small> る <small>横</small> り <small>や</small> 揚 <small>雪</small> 産 <small>産</small>	芥 <small>子</small> ち <small>や</small> 鳴 <small>り</small> し <small>時</small> 斗 <small>ハ</small> 只 <small>念</small> ら <small>ん</small>	木 <small>の</small> 実 <small>も</small> し <small>も</small> ら <small>ん</small> み <small>あ</small> を <small>は</small> り <small>ふ</small> の <small>月</small>	新 <small>東</small> や <small>む</small> し <small>海</small> の <small>う</small> 人 <small>能</small> 観 <small>箱</small>	魚 <small>深</small> ふ <small>み</small> 能 <small>清</small> め <small>く</small> し <small>一</small> の <small>能</small> ら <small>も</small> い	ま <small>ぬ</small> ら <small>し</small> 味 <small>を</small> し <small>し</small> し <small>清</small> あ <small>う</small> 丸	あ <small>ら</small> ま <small>り</small> 降 <small>る</small> 雪 <small>や</small> 飛 <small>ち</small> く <small>る</small>
名 <small>更</small> 子	宗 <small>善</small>	畧 <small>甫</small>	知 <small>遠</small>	東 <small>洲</small>	玄 <small>和</small>	波 <small>臨</small>

初秋の夕もよの暮——夜もくち 臨市

五月雪の帯もよの暮をけし 也大

初月や露の境内 槐月

初月や露の境内 桐一葉 如泉

初月や露の境内 板も舟 雨兮

初月や露の境内 板も舟 素水

初月や露の境内 板も舟 呂風

初月や露の境内 板も舟 只春

初月や露の境内 板も舟

初月や露の境内 板も舟

初月や露の境内 板も舟

初月や露の境内 板も舟

初月や露の境内 板も舟

初月や露の境内 板も舟

初月や露の境内 板も舟

初月や露の境内 板も舟

初月や露の境内 板も舟

初月や露の境内 板も舟

初月や露の境内 板も舟

初月や露の境内 板も舟

初月や露の境内 板も舟

子夜清夜

三

志清のそけい夢のささくをたたくは 新甫

暮よよせうこのささくを 葉菊のささ

江山を跋渉するもの十とせあまう位を

張ひ交さうのささくを人の多のささくの中を不尋

まのささくをささく又少のささくをささく

在尾をささくをささくの斗のささくをささく

ささくをささくをささくをささく

口よりのぬきささくをささくをささくの飯

一

おのささくをささくをささくをささくをささく

居士の旧識をささくをささくをささくをささく

初秋のささくをささくをささくの庭の山 新甫

月ささくをささくの星ささくをささくをささく

神ささくをささくの神ささくをささくをささく

市ささくをささくをささくをささくをささく

吹ささくをささくをささくをささくをささく

ささくをささくをささくをささくをささく

三

炬を燈の次より見返す明は處

男の飯を握る 坊 寺き

産考より法をさす里の木の志

様もまのあつと雪のともり

飛ぶんとぬき法あやむ仕持風

角力あつりの技持あつと

舟帰りを押す月よりのせ

字法のち産考あ何と廉

法

寺

井

堆

南

海

子

井

源考よる里の雪 若荷井

産考よる里の雪 若荷井

雨降る如給る 是 世 孝

七のりりよあを濁る 蛙 子

う法も華る 妻も 名 縛り 那 萱 相

何家考よる里の雪 産 瘡

新ふらうけふたうある 代 糸 り

あつとやあつとあつと 女 存 考 一 世

堆

南

海

子

井

堆

南

海

片落よの巻あらし世——日屋さん

よみこころの巻あらし世名札くまの巻

泣きや東風の巻あらし世のくまの巻

涙よの巻あらし世のくまの巻

あらしの巻あらし世のくまの巻

出水能引——あらしの巻あらし世

友誼の巻あらし世のくまの巻

あらしの巻あらし世のくまの巻

南 井 子 海 南 井 子 海 南 井 子

信りあらしの巻あらし世のくまの巻

是代と巻——あらしの巻あらし世

機摺りの巻あらし世のくまの巻

あらしの巻あらし世のくまの巻

黄子の巻あらし世のくまの巻

あらしの巻あらし世のくまの巻

南 井 子 海 南 井 子



昭和十一年

此をわよのまほしき後 卯 <sup>ニナ</sup> 蕉堂  
 藤 <sup>フジ</sup> 藤 <sup>フジ</sup> 藤 <sup>フジ</sup> 藤 <sup>フジ</sup> 藤 <sup>フジ</sup> 藤 <sup>フジ</sup> 藤 <sup>フジ</sup> 藤 <sup>フジ</sup> 藤 <sup>フジ</sup>  
 神宮のゆきう <sup>イッ</sup> 神宮のゆきう <sup>イッ</sup> 神宮のゆきう <sup>イッ</sup> 神宮のゆきう <sup>イッ</sup> 神宮のゆきう <sup>イッ</sup>  
 山 <sup>トサ</sup> 山 <sup>トサ</sup> 山 <sup>トサ</sup> 山 <sup>トサ</sup> 山 <sup>トサ</sup> 山 <sup>トサ</sup> 山 <sup>トサ</sup> 山 <sup>トサ</sup> 山 <sup>トサ</sup> 山 <sup>トサ</sup>  
 松風の <sup>セツ</sup> 松風の <sup>セツ</sup> 松風の <sup>セツ</sup> 松風の <sup>セツ</sup> 松風の <sup>セツ</sup> 松風の <sup>セツ</sup> 松風の <sup>セツ</sup> 松風の <sup>セツ</sup> 松風の <sup>セツ</sup> 松風の <sup>セツ</sup>  
 思 <sup>エト</sup> 思 <sup>エト</sup> 思 <sup>エト</sup> 思 <sup>エト</sup> 思 <sup>エト</sup> 思 <sup>エト</sup> 思 <sup>エト</sup> 思 <sup>エト</sup> 思 <sup>エト</sup> 思 <sup>エト</sup>  
 更古 <sup>セツ</sup> 更古 <sup>セツ</sup> 更古 <sup>セツ</sup> 更古 <sup>セツ</sup> 更古 <sup>セツ</sup> 更古 <sup>セツ</sup> 更古 <sup>セツ</sup> 更古 <sup>セツ</sup> 更古 <sup>セツ</sup> 更古 <sup>セツ</sup>  
 此 <sup>セツ</sup> 此 <sup>セツ</sup> 此 <sup>セツ</sup> 此 <sup>セツ</sup> 此 <sup>セツ</sup> 此 <sup>セツ</sup> 此 <sup>セツ</sup> 此 <sup>セツ</sup> 此 <sup>セツ</sup> 此 <sup>セツ</sup>

新元金百

